

# 中国語を母語とする JSL 学習者のカタカナ語表記習得過程に関する縦断的研究

志村 順子

キーワード：JSL、カタカナ語、縦断研究、表記

## 要旨

本研究では、中国語を母語とする初級日本語学習者のカタカナ語表記の発達を縦断的に観察した。学習者が苦手だと感じるカタカナ語の習得を扱った研究の多くは、表記の誤用を対象にしているにも拘らず、ディクテーションテストの結果をデータに用いているため、聞き取り能力の影響を受けたものとなっている。本研究では、表記そのものの内的を絞るため、従来のデータ採集方法に加え、絵を見て単語を書くテストも取り入れ、三種類の異なるテストを採用し縦断的にデータを収集した。その結果、比較的早い段階から習得が進んだ単語・停滞した単語、Uカーブが見られた単語等が確認された。さらに、カタカナ語の表記が必ずしも音声と対応していないことから、単語の発音を正確に聞き取れるようになったからといって、表記が正しく安定するとは限らないという現象も確認された。

## 1. はじめに

近年日本ではカタカナ言葉が増え続けカタカナ語の氾濫ともいわれている（熊抱 2003；国立国語研究所 2006）。カタカナ語の使用に対する日本国内の情勢に関しても、「外来語の表記」（文化庁 1991）や「外来語に関する意識調査」（国立国語研究所 2004）を始めとする日本人の使用に関するものから、留学生に対するカタカナ語意識調査（陣内 2008）等、様々な角度から問題提起がなされている。2013年現在、筆者が勤務する3校の日本語学校においても、学習者にとってカタカナ語は大きな負担になっていると感じられる。

本稿で述べるカタカナ語とは、外来語としてのカタカナ語でありその多くは欧米の言語に由来するものである。これらの多くは明治期以降に日本に大量に入ってきた言葉である。その表記に関しては日本語では外来語の表記は異表記が存在することが多く、複雑なしくみになっている。

外来語の表記の注意事項に関しては、原則と慣用といった表記の揺れや許容もある（文化庁 1991）。これは、例えばイ列・エ列の音の次に当たるものは原則として「ア」

と書くきまりがあるが、「ダイアル」は「ダイヤル」が正しく「タイア」は「タイヤ」といった慣用等である。

また、-er、-or、-arで終わる英語の単語は、「エレベーター／エレベータ」、「コンピューター／コンピュータ」のように末尾に長音記号を使う場合と使わない場合がある。

さらに長音使用の点では、本来長音符号「ー」を書くところを「バレー（球技）」と「バレエ（舞踏）」の区別のために書き分けたり（近藤・小森 2012）、「ミーラ」を「ミイラ」と長音符号の代わりに母音字を書くといった慣用もみられる。JFL 学習者を対象にした岡本（1997）も和語・漢語語彙に比べて、外来語のカタカナ語彙の習得は確実に定着するには時間を要すると述べている。

一方、カタカナ語の持つ意味の面では、外来語が日本に入ってくる前に使われていた国での意味と、日本で使用している意味とでは異なる場合があり、学習者の意味理解を一層難しくしているという側面も見られる。これら発音や意味の持つ問題を踏まえ、本研究では、学習者が難しいと考えているカタカナ語の学習をどのように進めていくかを見るため、表記に視点を置き長期的観察を行った。

## 2. 先行研究と研究課題

カタカナ語習得に関する研究は、母語の影響や、カタカナ語の基となる単語の発音や意味や綴りに由来するもの等、様々な観点でなされてきた。しかし、表記そのものに視点を置いたものは少ない。

JSL 日本語学習者のカタカナ語に関する意識の調査を行った研究である陣内（2008）では、「カタカナ文字」を書くことについてどう感じているかについてアンケートを行いその結果では、1年未満の学習者では、「難しい」「とても難しい」と答えたものが37.2%で、「ひらがなを書く」の7%とは大きく異なる結果が見られた。また陣内は、調査結果を母語別に見て、中国語母語話者にとって特に難易度が高く、カタカナ語学習の要望も高い（71.8%）ことを示し、彼らのカタカナ語に対する苦手意識のベースとなっている部分を、少しでも取り除く必要性を感じると述べている。しかし、陣内の研究は、学習者の感じている意識をアンケート調査したものであり、実際に単語を用いて検証したものではない。意識として難しいと感じているカタカナ語を、学習者が実際にどのように習得していくのかは明らかではない。

畑・山下（2010）は語彙指導を目指し、中・上級 JSL 学習者のディクテーション調査から得られたカタカナ語の誤用を、母語別に分析し問題点を探ったものである。調査対象者は、国内の大学で学ぶ日本語中・上級レベルの複数の国からの留学生40名である。調査の方法は、特殊拍を含む語彙を中心に、カタカナ語を2回聞かせシートに書かせる方法を取り、誤用を長音・促音・拗音・撥音・濁音・半濁音の欠落や挿入、母音や子音の変化やひらがな表記の誤記入に分け、出現の割合を母語別に分類している。このデータの誤答数の平均が3.4種類だったことから、学習者の誤答は無秩序ではなく、誤用の

パターンにも一定の基準があることが予想できるとし、中国語母語話者は長音の誤りが最も多いものの、濁音・半濁音の誤りも多いと述べ、母語の影響を検討する必要性を指摘している。また、畑・山下 (2010) は、ディクテーション調査では、聞いて書き取るという過程の中の音の聞き取り、音から意味の認識、カタカナでの表記の各段階の誤りが発生する可能性が考えられ、どの段階で誤りが生じたのかを特定するのは難しいとした上で、他の方法も用いて聞き取りの過程を探ることが課題であると述べている。つまり、畑・山下はカタカナ語を聞いて書き取るという行為は、ダイレクトに「聞く→書く」ではなく、「音の聞き取り→意味の認識→表記」という段階を踏んでいて、その過程のどこかで誤用が生じるとしている。

この研究では、『日本語能力試験出題基準』(2002) の4級語彙から問題を選んで、日本語中・上級者に出題しており、被験者の既知語を用いている。さらに、既習語の誤答をパターン化し分類してはいるが、誤答パターンを検出できるほど同じパターンでの比較は行ってはおらず、他の方法も用いて聞き取りの過程を探ることが必要だと述べている。

意味の認識に関して言えば、「コーヒー」を「コピー」と表記した場合、長音の欠落と半濁音の挿入といったような単純な分類では不十分であると考えられる。このようなケースの場合、「音の聞き取り→意味の認識」は間違っているが、「意味の認識（この場合被験者の認識はコピー）→表記の過程」は正しいと言える可能性もあるからである。もし仮に、文章として問題が出題された場合、問題文が「コーヒーを飲みます。」であれば、中・上級学習者は「飲む」の部分で「コピー」ではないと判断する可能性もある。学習者が「コーヒー」を「コーヒー」と聞き取り、意味を認識して正しく表記をしていく過程を見るための手段には、ディクテーション調査以外のテストを行う必要がある。

岡本 (1997) は、外来語の習得ストラテジーについて述べている。対象者は中国で JFL として日本語を学ぶ学習者である。日本語化された外来語の発音に触れる機会が少ない JFL 学習者の場合、カタカナ語の習得は不利であると論じている。この研究の対象者は76名で、研究者として高レベルの英語をマスターした学習者であり、初めて日本語を学ぶ者が殆どである。学習開始1か月目と4か月目の2回の書き取りテストを基に記述されている。この結果、1回目のテストでは正しく書けていたのに2回目のテストでは誤答となったものが、外来語のカタカナ語彙には1割程度現れたことから、ひらがな表記語彙に比べカタカナ語彙は確実に定着するには時間がかかると述べている。この中で、学習者は外来語すべてについて定着が遅いというわけではなく、「パーティー」など中国人学習者が苦手とする半濁音や長音や拗音を含む単語であっても、教室活動で比較的例示される頻度が高いものは定着も速いと記述している。

つまり、習得の経過を見ていく場合には、習得に時間を要する困難な単語のみに注目するのではなく、定着が速く、また確実に進む単語に関しても見ていく必要がある。また岡本は、日本語初級段階における発音と表記の関係は、切り離せないものであると考

え、学習者が日頃の教室活動で発音に問題のある語彙を用いてテストを実施している。出題には短文を用い、解答から単語のみを取り上げ、聞き取った音、または習得した語彙が正確に表記されたかどうかには焦点を当てている。しかし、岡本は4か月しか見ておらず、1か月目と4か月目に実施した2回の誤答率の割合を基に判断をしている。2回の結果だけで判断するのではなく、更なる長期的な調査と、単語ごとの個別の検証が必要である。

そこで、本研究では調査期間を1年に設定し縦断研究を行うことにより、来日間もない中国人学習者が、難しいとされるカタカナ語の表記をどのように習得していくかを見ていこうと考えた。さらに、第二言語としてのカタカナ語の習得研究が、ディクテーションや母語からの影響を追究するという形式に偏る傾向にあるため、見落としがちになっている表記そのものに視点を置こうと考えた。これまでの研究の多くは、聞き取らせて書かせる方法を取っており、聞き取り能力の影響を受けたものとなっている。スペリングなどの表記は、聞いたままを書くというよりも、表記そのものを覚えるという側面も強いため、聞き取らせて書くのでは、各語の表記の発達を見るには十分でないと考えた。そのため、JSL 学習者のカタカナ語の表記発達過程を見る為の、絵を見てカタカナ語を書く方法のテストも取り入れ、以下に挙げる三種類のテストを用いて表記の変化を見ていこうと考えた。

- (1) 音声刺激を受けずに、視覚のみで単語を認知し表記に変換するテスト。
- (2) 単語の音のみを聞いて表記に変換するテスト。
- (3) 視覚・聴覚・文章からの推測を通じて表記に変換するテスト。

本研究は、これら三種類のテストを長期的に見ていくことで、学習の初期段階の表記の変化を考察しようとするものである。

### 3. 研究方法

#### 3.1 調査対象者

調査対象者は、2011年10月に来日し日本国内の日本語学校に通う中国からの留学生21名で、日本での学習を始めて1か月目の初級学習者である。大学・大学院・専門学校への進学を目的とした二十歳前後の学習者で、母語は全員中国語である。1回目のテストから、全ての単語が正しくカタカナを用いて書けている学習者1名に関しては、調査対象からはずした。

#### 3.2 調査方法

調査はカタカナ語のテストを用いて行った。調査期間を日本での学習開始からの1年間とし、4回のテストを実施した。実施は2011年10月に来日した学生に対し11月、2月、7月、9月の4回行い、テストは3.4に述べる①～③の三種類で問題数は各12問とした。各単語は全て教室活動における既習語を用い、同じ単語を使用した。

### 3.3 調査期間と回数

本研究は調査期間を1年間に設定した。岡本（1997）では JFL 学習者を対象に学習開始から1か月目に初回のテストを行い、4か月目に2回目のテストを実施するという4か月間のデータにおいて、1回目のテストで正しく書けていたのに、2回目には正しくかけていなかった単語の出現について述べている。この結果を受けて、2回のテストを対象にした岡本の研究では見られない、その後の更なる変化を見ようと考えた。そして、期間を1年間に設定し、テストの回数も2011年11月と4か月目に当たる2月、さらに7月と10月に行い、全4回のテストを実施した。1回目から4回目まで2クラスを対象に、計4回ずつ行ったテストから2回以上テストに参加した21名のデータを採用した。

### 3.4 テストの種類と内容

テストは以下の①～③の三種類である。

- ①絵を見て答えをカタカナで書く【P テスト】。
- ②単語を聞いて答えをカタカナで書く【L テスト】。
- ③問題文を聞いて絵を見て答えをカタカナで書く【PL テスト】。これは、問題文のカタカナ語のみを記入する虫食い形式のテストである。

それぞれのテストごとに12問の問題を出題した。各テストの時間は3分間である。P テストは12種類の単語を表す絵を提示し、それぞれの絵の下に解答欄を設け、記入するように指示をした。「音の聞き取りから意味の確認まで」の部分を外し、「意味の確認から直接カタカナでの表記まで」の部分のみを見るために、音声を排除し、絵のみを見てその単語を表記することを課題とした。聞き取れないから書けないという従来の単語テスト、特にカタカナ語のテストに関しては、その背景にある基になる言語、特に英語からの影響が指摘されることも多い。そこで学習者の持つ単語表記能力のみを見るために、絵を提示する方法をとり、単語を認識してから表記するまでの部分のみを見た。この方法を取ることで、カタカナ語を正確に書けない原因は、正確に聞き取れないからではないか、という疑問にたいして検証ができると考えたからである。

L テストは、P テストで提示したのと同じ単語を3回ずつ読み上げた。各単語ごとにポーズを入れ、文字数の少ない単語と多い単語では差をつけた。「チョコレート」・「コンピューター」・「パスポート」・「エレベーター」・「エスカレーター」は1語に使用した時間は概ね18秒であった。「ジュース」・「ベッド」・「ボタン」・「スプーン」・「サッカー」・「コピー」・「コーヒー」は概ね12秒ずつ使用した。

PL テストも同様の時間配分である。問題文を3回ずつ読み上げ、文章中の単語部分を（ ）にして穴埋め問題の形式で作成した。さらに、（ ）の下には単語の絵も提示した。出題文章はなるべくテキスト『みんなの日本語初級 I 本冊』からの文をそのまま引用し、例えば「コーヒー」の場合では『コーヒーを飲みます。』と読み上げ、解答欄は、『（ ）を飲みます。』のようにして、（ ）の下にコーヒーの絵

を添えた。

最初に絵を見て書く P テストを行うことで、音からの刺激を遮断し、絵のみを見て認知した単語の表記を見ようと考えた。次に、音声を聞いて書き取る従来型ディクテーションテストである L テストを行い、最後に絵と音声に加え文章からの単語の推測を可能にした PL テストを行い、それぞれの表記の様子を個別に観察することを試みた。

各テストの間には30秒の間隔をとり、テストの回収と配布の時間に充てた。テスト開始から、終了までの時間は約10分である。初回のみ出題数が15問だったため約12分間かかった。テストには予め録音したカセットテープを使用した。しかし、3回目にカセットの使用機材に不具合が発生したため、3回目以降はテープを録音した本人が時間を確認しながら口頭で行った。

### 3.5 使用した単語

テストに使用した単語は、教材として学校で使用している『みんなの日本語初級 I 本冊』から既習語を用いた。①「チョコレート」・②「コンピューター」・③「パスポート」・④「ジュース」・⑤「ベッド」・⑥「ボタン」・⑦「スプーン」・⑧「サッカー」・⑨「エレベーター」・⑩「エスカレーター」・⑪「コピー」・⑫「コーヒー」の全12語である。初回のテストには、「テーブル」「テープレコーダー」「シャープペンシル」の3語が含まれていたが、P テストの表記が「テーブル」は「机」と書いた学習者が大多数をしめ、「テープレコーダー」では「ラジオ」や「カセット」と表記したものが多く、既習語であっても「テープレコーダー」そのものを実際に見たことが無く、わからないとのことであったので、2回目のテストからははずした。「シャープペンシル」でも「ボールペン」「鉛筆」と表記した解答が多く、特に絵を見ただけでは、「ボールペン」との区別がつきにくいため2回目以降のテストからははずした。単語の前に付した丸数字は出題の順番を示している。各テストでは毎回この出題順番の通りに実施した。

使用単語の選択にあたっては、既習語の中から学習者が発音や表記において苦手とする長音・促音・撥音・濁音・半濁音・拗音を含む単語、および「コピー」・「コーヒー」のように発音と表記が似ていて、区別がつきにくいとされる語も対象として選んだ。

### 3.6 調査の実施

調査は全て都内の日本語学校で実施した。実施に先立ち、研究の内容を説明し学校の許可を得た。テストを始める前に学生に口頭で主旨を説明した。調査の性質上データは回収のみ行い、返却や添削等は行わなかった。

## 4. 結果と考察

三種類のテストから得られた結果を分類すると、概ね次の ABC のグループに分類することが出来る（単語の頭に冠した番号は、出題の順番を示している）。

A グループ：徐々に習得の進んだ単語。①チョコレート、②コンピュータ、③パスポート、④ジュース、⑨エレベーター、⑩エスカレーター、⑪コピー、

B グループ：最後まで表記の安定しなかった単語。⑤ベッド、⑥ボタン、⑦スプーン

C グループ：1回目のテストで多くの学習者が正しく表記できたが、2・3回目のテストで誤りが増加し、4回目のテストで再び正しく書けるようになるという Uカーブの推移が見られた単語。⑧サッカー、⑫コーヒー

各グループごとの結果を、代表的な単語の事例を基に以下に述べる。

#### 4.1 A グループ：徐々に習得の進んだ単語

A グループの単語は①チョコレート、②コンピュータ、③パスポート、④ジュース、⑨エレベーター、⑩エスカレーター、⑪コピーの7語であり、全単語数の過半数を占めている。これらの単語に共通して見られる特徴は、2回目のテストまでは表記にばらつきがあったものの、3回目のテストでは殆どの学習者が目標言語通りの表記をしており、4回目のテストに関しても逆行等の現象は見られず、習得が順調に進んだことである。特に、「チョコレート」「コンピューター」「パスポート」の表記は、3回目以降の各テストにおける目標言語の表記と異なる表記はそれぞれ1例以下である。

ここでは、徐々に習得の進んだ A グループの例として、表1に「チョコレート」の学習者ごとの表記の変化を示す。「チョコレート」は、1名の P・L テストを除いて、3・4 回目のテストを受けた学習者全員が3回目のテストで正しく書けるようになっており、これらの結果から順調に表記の習得が進んだ単語と判断した。

左列一番上の①は「チョコレート」の単語の出題番号を表し、行頭の番号は学習者番号を示している。網掛けの部分は目標言語通りの表記以外の表記をした単語である（後ろの表3、表5も同様に表す）。

表1 「チョコレート」に関する表記のデータ

①	Pテスト1回目	Lテスト1回目	PLテスト1回目	Pテスト2回目	Lテスト2回目	PLテスト2回目
2	チョコレート	チョコレート	チョコレート	チョコレートー	チョコレート	チョコレートー
5	チョコレート	チョコレート	チョコレート	チョコレート	チョコレート	チョコレート
6	チョコレート	チョコレット	チョコレート	チョコレート	チョコレート	チョコレート
7	チョコレート'	チョコレート	チョコレート'	チョコレート	チョコレート	チョコレート
8	チョコレート	チョコレト	チョコレート	チョコレート	チョコーレート	チョコレート
10	チョコウレート	チョコウレート	チョコウレート	チョコレート	チョコレートー	チョコレートー
12						
13	チョコレート	チョコレート'	チョコレート	チョコレート	チョコレート	チョコレート
15	チョコレート	チョコレート	チョコレート	チョコレート	チョコレート	チョコレート
22	チョコレート	チョコレート	チョコレート'	チョコレート	チョコレート	チョコレート
23	チョコレト		チョコレト	チョコレト	チョコレト	チョコレト
29	チョコレート'	チョコレート'	チョコレート	チョコレート	チョコレート	チョコレート
30	チョコレト	チュコレート	チョコレト	チョコレト	チョコレト	チョコレート
32				チュ	チョコレート	チョコレト'
33	ケシゴム	チョコーコール	チョコレート'	ケシゴー		チョコレート
34	チョコ	チョコレート	チョコレート'	チョコレト	チョコレト	チョコレート
35	チ クレート	チョコレート	チョコレート	チョコレート	チョコレート	チョコレト
36	チョコレート	チョコレート	チョコレート	チョコエート	チューユー	チョコレート
37	チョコレート		チョコレート			チョコレート
38	チョコレート	チョコレート	チョコレート	チョコレート		チョコレート
40	チョコレート		チョコレート	けし	チュカ	

①	Pテスト3回目	Lテスト3回目	PLテスト3回目	Pテスト4回目	Lテスト4回目	PLテスト4回目
2	チョコレート	チョコレート	チョコレート	チョコレート	チョコレート	チョコレート
5						
6	チョコレート	チョコレート	チョコレート			
7	チョコレート	チョコレート	チョコレート	チョコレート	チョコレート	チョコレート
8						
10						
12	チョコレート	チョコレート	チョコレート	チョコレート	チョコレート	チョコレート
13	チョコレート	チョコレート	チョコレート			
15	チョコレート	チョコレート	チョコレート	チョコレート	チョコレート	チョコレート
22	ケシゴム	チョコーコレト	チョコレート			
23						
29	チョコレート	チョコレート	チョコレート			
30						
32	チョコレート	チョコレート	チョコレート	チョコレート	チョコレート	チョコレート
33						
34	チョコレート	チョコレート	チョコレート	チョコレート	チョコレート	チョコレート
35						
36	チョコレート	チョコレート	チョコレート			
37						
38						
40			チョコレート			



目標言語通りの表記である「チョコレート」以外の表記をした答えは合計44であったが、その表記バラエティは20種類で、それぞれの数を表2に示す。表2の( )の数字は同じ表記が書かれた数である。括弧が無いものは1例のみのものである。P テストでケシゴム・ケシゴ-・けしと書かれたものについては絵を見てケシゴムと判断した結果と考え、チョコレートの表記バラエティーから外した。

表2「チョコレート」の表記バラエティ

チョコレート (11)	チョコレド (8)	チョコレートー (4)	チョウコレート (3)
チココレート (2)	チッコレト (2)	チクレート	チョココンレート
チョーエート	チョーコレート	チョコレド	チョココンレート
チュ	チュカ	チョコ	チコレット
チューユー	チョーコレト	チョーコール	チュコレート

「チョコレート」に関する表記では、拗音と清濁に関したものが目立つが、数の上から見ると最も多いのは、長音の欠落や過剰使用に関するものである。これはこの単語に限ったことではなく、他の単語にも多く見られた。主だった現象は以下の通りである。

長音に関わる誤りは合計27例あり、長音の欠落によるもの(18例)、過剰使用(8例)、位置のずれによるもの(1例)であった。拗音に関する誤りは合計10例あり、拗音「ヨ」を拗音「ユ」と書いた「チュ」「チュカ」「チューユー」「チュコレート」(4例)、促音にした「チッコレト」(2例)、「ヨ」を「コ」にした「チココレート」(2例)、欠落による「チコレット」の(1例)、クにした「チクレート」(1例)である。清濁に関するものは合計9例あり、清音「ト」を濁音「ド」にした「チョコレド」(8例)、「チョコレド」(1例)である。

チョコレートの表記バラエティの中で最も多いものは「チョコレート」(11例)で、次が「チョコレド」(8例)である。この「チョコレド」は1回目のテストに7例見られ、2回目のテストでは1例であった。語末の清音を濁音に置き換えたものだが、テスト毎の出現にはばらつきがあり、1回目のP・Lテスト各(2例)、PLテスト(4例)、2回目PLテスト(1例)となっている。

岡本(1997)で見られた1回目のテストでは正しく書けたにもかかわらず、2回目のテストでは書けなくなったといった現象は学習者36番でみられた。この学習者は、1回目の三種類のテストでは正しく書けていたが、2回目のPテストでは「チョエート」Lテストでは「チューユー」といった表記になり、一見後退したようにも思われた。しかし、3回目のテストでは三種類のテスト共「チョコレート」と正しく表記をしている。チョコレートは1回目のPテストで「チョコレート」と表記した学習者が11名、Lテストでは8名、PLテストでは12名と多くの学習者が目標言語通りの表記である「チョコレート」と正しく表記している。聞いて書くより絵を見て書く方が優位である。「チョコレート」

は拗音や長音を含む比較的長い単語であるが、なぜこのように、早い段階で表記が安定したのだろうか。教室活動においても、「好きな食べ物は何か。」といった質問に対して「チョコレート。」と答える学習者が少なくない。学習者にとって、値段が手ごろな好物として、関わりが強いものようである。スーパーやコンビニで目にする機会も多く、よく見ることが早い時期からの表記の安定に影響を及ぼしたのではないかと考えられる。

Aグループの他の単語②コンピューター、③パスポート、④ジュース、⑨エレベーター、⑩エスカレーター、⑪コピーに関してもチョコレートとほぼ同様の結果が見られた。2回目まではエラー表記の多かった単語であっても、3回目のテストでは正しく書けたものが多かった。③パスポートに関しても、半濁音2つと長音を含む5拍の長い単語であり、岡本(1997)で、中国語母語話者が弁別に困難をきたす傾向があるとする[t][d]、[p][b]、[k][g]、[l]のうち、[p]を2つ含む語であるにも拘らず、3回目にはほとんどの学習者の表記が早い段階から安定の傾向にあった。エラー表記のパターンも長音欠落と半濁音と濁音・清音との入れ替え等が目立っていたが、順調に習得が進んだ単語である。習得の進んだ単語に共通する要素があると考えられる。

#### 4.2 Bグループ：最後まで表記の安定しなかった単語

Bグループの単語は⑤ベッド、⑥ボタン、⑦スプーンである。これ等の単語に共通して見られる特徴は、4回のテストの結果を通して習得が順調に進まず、表記が安定しなかった点である。

ここでは、Bグループの例として、表3に「ベッド」の学習者ごとの表記の変化を示す。表1同様左列上の⑤は「ベッド」の出題の順番を示し、行頭の番号は学習者の番号を示している。

表3 「ベッド」に関する表記のデータ

⑤	Pテスト1回目	Lテスト1回目	PLテスト1回目	Pテスト2回目	Lテスト2回目	PLテスト2回目
2	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ット
5	ベ'ート	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ット
6	ベ'ット	ベ'ート	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ット
7	ベ'ッケ	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ットー	ベ'ート	ベ'ットー
8	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ット
10	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ット
12						
13	ベ'ート	ベ'ート	ベ'ート	ベ'ート	ー'ト	ベ'ート
15	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ット
22	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ート	テ'ート	ベ'ート
23	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ット	テ'ート	ベ'ット
29	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ート	ト	ベ'ート
30	ベ'ート	ベ'ート	ベ'ート	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ット
32			ベ'ット	ベ'ート	ベ'ート	ベ'ト
33	ベ'ット		ベ'ット	ベ'ット	ベ'ト	ベ'ット
34	ベ'ット	ト	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ート	ベ'ット
35	ー'ト	ベ'ート	ベ'ート	ベ'ト	ベ'ート	ベ'ト
36		ベ'ト	ベ'ート		ト	ベ'ト
37	ベ'ット		ベ'ット		ベ'ット	ベ'ート
38						ベ'ト
40	ベ'ット		ベ'ット	ベ'ト		ベ'ト

⑤	Pテスト3回目	Lテスト3回目	PLテスト3回目	Pテスト4回目	Lテスト4回目	PLテスト4回目
2	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ット
5						
6	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ット			
7	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ット
8						
10						
12	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ット
13	ベ'ート	ベ'ート	ベ'ート			
15	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ット
22	ベ'ート	ベ'ート	ベ'ート			
23						
29	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ット			
30						
32	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ット
33						
34	ベ'ート	ベ'ート	ベ'ット	ベ'ート	ベ'ット	ベ'ット
35						
36	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ット			
37						
38						
40	ベ'ット	ベ'ット	ベ'ット			

目標言語通りの表記である「ベッド」以外の表記をした答えは合計113であったが、その表記バラエティは18種類で、それぞれの数は、表4のとおりである。( )の数字は同じ表記をした数を示す。括弧が無いものは1例のみのものである。

表4 「ベッド」の表記バラエティ

ベット (50)	ベート (20)	ベード (12)	ペット (7)	ベト (4)	ベド (4)
ト (3)	ヘッド (2)	ベッダー (2)	デート	デード	ヘット
ヘッケ	ード	ート	ベツド	ヘド	ペッド

「ベッド」は調査データの他の単語に比べて習得しにくい単語の一つである。「濁音+促音+濁音」で構成される3文字の短い単語であるが、清濁の問題に加え、促音と実際には単語中に存在しない長音表記が出現するという現象が起こり、1・2回目のテストでは三種類の全てのテストで「ベッド」と正しく書いていた学習者数名も、3回目の三種類全てのテストで「ベッド」と書いた者は1名もいない。

「ベッド」に関する特徴的現象は、目標言語以外の表記数113例に対して表記のバラエティが18と少ないことである。さらに、「ベッド」以外の表記の半数近くを占めるのが「ベット」であることも、特徴的である。

「ベッド」は他の単語に比べて習得が困難だという結果となった単語の一つであるが、表記のパターンにはある程度共通性が見られる。それは、語末の濁音「ド」を清音「ト」にした「ベット」であり、語中の促音を長音にした「ベード」、さらにはその両方を合わせた「ベート」である。これらが表記の8割近くを占めている。

また、2回目のテストで「ベッド」と表記していた対象者が、3回目のテストで全員目標言語通りの表記とは異なる表記になるといった現象も見られた。そこで、10歳未満の小学生と、10代・20代・30代・50代・70代の日本語母語話者数名ずつにベッドの絵を見せ、カタカナで書いてもらったところ、30代までは概ね「ベッド」と表記し50代からは殆どが「ベット」と表記した。40代には実施できなかったが、テストを受けた70代は「ベット」が正しいと思っており、発音に関しても語尾を「ド」とは発音していなかった。もともと日本語の発音では、促音に後続するのは無声子音であり、有声子音の前に促音は現れないため、「ベッド」「バッグ」のように促音に有声子音が後続する外来語の場合、日本語母語話者は後続子音を「ベット」「バック」と発音することが定着している(カッケンブッシュ知念 2008)。語尾の「ド」を「ト」と表記するという結果が母語話者50代以上の表記と共通する点は興味深い。なぜ「ベッド」の「ド」を揃って無声子音で表記するようになっていたかは、実際の発音を徐々に聞き取れるようになり、それが影響した可能性もあるが、他の要因が影響している可能性もある。この点に関しては課題の残るところである。

#### 4.3 C グループ：目標言語通りの表記をした数が減少し再び増加の傾向にあったもの

C グループの単語は⑧サッカー、⑫コーヒーである。これらの単語に共通して見られる特徴は、1回目のテストの表記が目標言語通りの表記をしている学習者数が多く、その後2・3回目のテストで減少し、4回目の解答で再び増加したといった現象が確認された点である。特に「コーヒー」は1回目のテストで12の単語の中で最も目標言語通りの表記が多い単語であった。しかし、2回目、3回目の表記では長音の欠落等が目立ち、4回目で目標言語通りの表記が再び多く見られた。ここでは、C グループの例として表5に、「コーヒー」の学習者ごとの表記の変化を示す。表5の表の見方は、表1同様左列上の⑫は「コーヒー」の出題の順番を示し、行頭の番号は学習者の番号を示している。

表5 「コーヒー」の学習者ごとの表記の変化

⑫	Pテスト1回目	Lテスト1回目	PLテスト1回目	Pテスト2回目	Lテスト2回目	PLテスト2回目
2	コーヒー	コーヒー	コーヒー	コーヒー	コーヒ	コーヒー
5	コーヒー	コーヒー	コーヒー	コーヒー	コーヒー	コーヒー
6	コーヒー	コーヒー	コーヒー	コーヒー	コーヒ	コーヒー
7	コーヒー	コーヒー	コーヒー	コーヒー	コーヒー	コーヒー
8	コーヒー	コーヒー	コーヒー	コーシ	コーヒー	コーヒー
10	コーヒー	コービ	コーヒー	コーヒー	コーヒ	コーヒー
12						
13	コーヒー	コーヒー	コーヒー	コーヒ	コーヒ	コーヒ
15	コービ	コービ	コーヒ	コーブ	コービ	コービ
22	コーヒー	コーヒー	コーヒー	コーヒー	コーヒー	コーヒー
23	コーヒー	コーヒー	コーヒー	コーヒー	コーヒー	コーヒー
29	コーヒー	コーヒー	コーヒー	コービ	コービ	コーヒ
30	コーヒー	コーヒー	コーヒー	コーヒー	コーヒー	コーヒー
32	コーヒー	コーヒー	コーヒー	コーヒ	コヒ	コーヒ
33	コーヒ	コービ	コーヒー	コーヒ	コーヒ	コーヒ
34	コーヒー	コーヒ	コーヒー	コーヒ	コーヒ	コーヒ
35	コーヒ	コーヒー	コーヒー	コヒ	コヒ	コーヒー
36	コーヒー	コーヒー	コーヒー	コーヒー	コーヒー	コーヒー
37	コーヒー	コーヒー	コーヒー	コーヒー	コーヒー	コーヒー
38	コーヒー			コーヒ	コヒ	コーヒー
40	コーヒー	コーヒー	コーヒー	コーヒー	コーヒー	コーヒー

⑫	Pテスト3回目	Lテスト3回目	PLテスト3回目	Pテスト4回目	Lテスト4回目	PLテスト4回目
2	コーヒー	コーヒー	コーヒー	コーヒー	コーヒー	コーヒー
5						
6	コーヒー	コーヒー	コーヒー			
7	コーヒー	コーヒー	コーヒー	コーヒー	コーヒー	コーヒー
8						
10						
12	コーヒー	コーヒー	コーヒー	コーヒー	コーヒー	コーヒー
13	コーヒ	コーヒ	コーヒ			
15	コーヒ <sup>˙</sup>	コーヒー	コーヒー	コーヒ <sup>˙</sup>	コーヒー	コーヒー
22		コーヒ <sup>˙</sup>	コーヒー			
23						
29	コーヒ	コーヒ	コーヒ			
30						
32	コーヒ	コーヒー	コーヒー	コーヒー	コーヒー	コーヒー
33						
34	コーヒ	コーヒ	コーヒ	コーヒ	コーヒ	コーヒー
35						
36	コーヒ <sup>˙</sup>	コーヒー	コーヒー			
37						
38						
40	コーヒ	コーヒ	コーヒ			

目標言語通りの表記である「コーヒー」以外の表記をした答えは合計52であったが、その表記バラエティは10種類で、それぞれの数は、表6のとおりであった。( )の数字は同じ表記をした数を示す、括弧が無いものは1例のみのものである。

表6 「コーヒー」の表記バラエティ

コーヒ (34)	コービ (6)	コヒー (3)	コーピー (3)
コーピ	コヒ	コビー	コービー
コーシー	コーブー		

長音欠落によるものは「コーヒ」(34例)・「コービ」(6例)、「コヒー」(3例)、「コーピ」、「コヒ」、「コビー」の46例である。「コーヒ」「コービ」「コヒー」「コーピ」は語尾の長音の欠落であり、「コヒ」は語中と語尾の欠落、「コビー」は語中の欠落である。清音「ヒ」を濁音「ビ」にしたものは「コービ」(6例)、「コビー」「コービー」で、計8例あった。清音「ヒ」を半濁音に「ピ」にしたものは、「コーピー」(3例)、「コーピ」で、計4例である。表記エラーを見た場合「コーヒー」も他の単語同様、語尾の長音が欠落した表記が多く見られた。

「コーヒー」は1回目のテストにおいて「コーヒー」と正しく表記したものが多い単語である。特に PL テストでは、1名を除く全員の表記が目標言語の通りの表記であっ

た。しかしその後、1回目のテストでは目標言語の通りの表記をしていたにも関わらず2・3回目のテストでは目標言語通りの表記が減少し、4回目（一部は3回目）に再び正しく書けるという現象が見られた。4回のテストを通して見た場合、1回目のテストの表記がそのまま安定するのではなく、2回目・3回目の結果ではエラー表記に転じたものが多く、特に2回目のLテストでの語末の長音欠落が多く見られた。その後4回目（一部は3回目）のテストで多くの学習者の表記が目標言語通りの表記に戻るというUカーブ現象が見られた。「コーヒー」は長音2つを含み4拍のうち2拍が長音である。このことも表記を難しくしている要因とも考えられるが、Lテストのように単語のみを「コーヒー」と読み上げて出題する場合と、PLテストのように「コーヒーを飲みます。」と文章で出題する場合とでは単語の聞き取りに影響が出たとも考えられる。

## 5. 考察

前節で述べた結果から、JSL 学習者のカタカナ語の表記の習得過程は、次のA・B・Cの3つのグループに分類できる。

A グループは順調に習得が進んだ語群であり、1年を通してほぼすべての学習者の表記が目標言語通りの表記に到達したと言えるグループである。このグループの単語は共通して3回目のテストでかなりの学習者の表記が目標言語通りの表記に近づき、最後の4回目のテストの結果も順調に進み、殆どの学習者の表記が3回目、4回目と安定したものとなっていた。順調に習得の進んだ単語は、この2回目と3回目の間に大きな変化があったと考えられる。この間の変化が他のB・Cグループとの大きな違いである。

また、先行研究における特殊音素や拗音・濁音・半濁音などに関するものを見ると、母語との関係や単語の拍数などに関連したものが目に付くが、Aグループの単語を見ると先行研究では難しいとされる要素を含んだ単語であっても、比較的順調に習得が進んでいる。実施した3回目のテストで大部分の学習者が正しく表記しており、4回目のテストでも後戻り現象は殆ど確認されていない。

これらの単語を見ると、発音等を対象とした先行研究では述べられていない、自分とのかかわりの強さによる影響が感じられる。例えばAグループの「パスポート」は教室活動以外でもよく目や耳にする単語である。学校のホワイトボードや掲示板にも申し込み等で書かれているのをよく目にした。留学生にとって最も重要なものの一つであり、書類等でも目にする機会の多い単語である。音声のインプットも、目から入る表記のインプットも多かっただろう。

Aグループの「ジュース」「チョコレート」等は好物という点で、自分とのかかわりが強い言葉は記憶されやすい、ということに関係してくると考えられる。自分の住所や最寄り駅の名前などは複雑な読み方や表記であっても、来日間もない学習者でさえ、殆どの学習者は書いたり読んだりしている。何かを見ながらでもそうしないと、生活に支障をきたすからである。そこには必要性とともに正確さもある程度要求される。これら

の要素も関係して A グループの単語は表記が進んだ可能性がある。

B グループの単語は4回目のテストまで、目標言語通りの表記に近づかなかった単語である。

「ベッド」は、語末の濁音を清音で表記するという現象が多く見られた単語だが、日本語化された発音の影響を受けて、「ド」を「ト」と表記するようになったと考えられる。3回目の結果で殆どの学習者の結果にこの現象が現れた。「ベッド」の表記に関しては語末の濁音が清音になるという、共通のパターンが確認された。

ほかに B グループに含まれる「スプーン」は表記のバラエティも多く、1人の学習者が1度しか書かないエラー表記が21種類も見られ、畑・山下（2010）が「ある程度規則性が見られる」と言っているのとは異なる結果も見られた。「スプーン」は教室活動での使用も少ない。学習者に確認したところ、生活面でのインプットも少ない単語である。教科書での記述も少なく教室活動での使用も少ない単語である。今回の調査対象者に半年後インタビューをおこなった結果では、「スプーン」は発話もしない単語であると言われた。教室活動でのインプットはあったとしても、教室以外での使用は殆ど無いようだ。また、A グループの単語とは異なり、自分との関わりの点でも薄い単語である。聞き取り能力や使用頻度などと、目標言語通りの表記との因果関係を見る等の、さらなる検証が必要であると考えられる。

C グループの単語は、当初目標言語の表記を書けていたものが書けなくなり、再び書けるようになるという現象が見られた単語である。1回目のテストより、「サッカー」も「コーヒー」も2回目のテストの方がエラー表記が増えた。しかし、4回目のテストの結果は2・3回目よりも良く、Uカーブを呈している。岡本（1997）で述べている1回目のテストで正解だったもののうち、1割が誤答になった現象にも似ている。そして、4回目のテストでは目標言語の表記に近づいたということがわかった。

調査は4回目までのためその後この目標言語の表記が定着したかは確認できない。「サッカー」も「コーヒー」も教室活動での使用の多い単語である。「コーヒーを飲みます。」といったフレーズを、学習者達は教室で何度耳にし、また発話したかわからない。それにも拘わらず A グループのように習得が順調に進まなかった。授業中ある学習者が尋ねてもいないのに、「自分たちはそんなにコーヒーは飲みません。」と言い出したことがある。「サッカー」はするかと質問したところ「バスケットボール」はするが、「サッカー」は殆どしないとのことだった。本研究で対象とした中国語母語の学習者たちは、実際にはそれほどコーヒーを飲んでいるわけではないようだ。また、サッカーも見ることはあっても、自分でするスポーツではない。彼らにとって、「コーヒーを飲みます。」のようなフレーズは、あくまで教室の中での発話であり日常生活の発話ではない。この点では、たとえばコーヒーをよく飲む習慣のある学習者であれば、異なる結果が出る可能性もあるだろう。C グループの単語は、自分とのかかわりがそれほど密着では無いという要因が、少なからず単語の表記の定着に影響を及ぼしていると考えられる。



U字型の出現に関しては、最初は習ったばかりで習ったとおりに書いたが、徐々に習った言葉が増え、似た言葉を学んだりすることでエラーとなり、後退と前進を繰り返しながら習得が進んだのだと考えられる。今回の調査でAグループになった単語とCグループになった単語を比較して考えると、Aグループの単語は自分とのかかわりが強かったり、接触頻度が高かったりしたために、Cグループの単語に比べ、後退が起こりにくかったことが考えられる。

## 6. まとめ

ABCのそれぞれのグループの単語を比較すると、習得が比較的順調に進んだAグループの単語は、日常で学習者自身が使用している単語であることに気づく。つまり、学習者は「チョコレート」を食べ、「ジュース」を飲み、「コンピューター」を使い、「パスポート」を持ち、「コピー」を取り、「エレベーター」や「エスカレーター」を使って生活をしており、それらは教室活動だけではなく生活や日常と直結した単語であり、学習者にとってかかわりの強い言葉であるということである。Uカーブの見られたCグループの「サッカー」や「コーヒー」は、授業では多く使用していても、学習者の日常生活に直接関係したのではなく、あくまで教室活動の一部であり、個人差はあるにしてもAグループの単語ほど自分にとって密接とは言えないと考えられる。

以上の結果を踏まえ、カタカナ語の表記習得過程は一定のものではなく、単語によっても違いがあり、また学習時間の経過とともに習得が進むとは限らないことがわかった。また、岡本（1997）では見ることが出来なかった4か月目以降のデータでは、習得が順調な単語は4か月目以降に習得が進み安定するという結果が見られた。しかし、テストは4回しか実施していないため時期については限定できない。

聞き取り能力と表記の関係については、「ベッド」にみられたように、JSL 学習者として日本に滞在し、日本語化された発音を聞き取れるようになり、表記がエラーに転じるという現象も、学習者に共通に確認された興味深い結果である。音からの刺激を受けないPテストの結果でも、Lテスト同様に「ベット」と表記したものが表記の大部分を占めていたことから、発音の聞き取り能力が発達することが、表記の習得に良い影響を及ぼすとは一概に言い切れないことが示唆された。しかし、語末の濁音に関するものは一語のみの検証にすぎないため更なる調査が必要である。

畑・山下（2010）では、音の聞き取り、意味の確認、そしてカタカナの表記までの過程の中で、表記の誤用が生じると述べている。しかし、Pテストで絵を見て絵から単語を認識し表記する場合でも、単語の表記がわからなければ書けない。逆に表記を知らない単語でも音声の刺激を受けて書ける場合もあるだろう。また、「ベッド」のように発音につられ正確さを失った可能性のある単語も存在する。これらを踏まえると、データ収集に3種類のテストを用いたことは有効であったと考えるが、さらに、今回選定した12語以外の単語を用いた更なる検証も必要である。そして、「パスポート」のように難

しい要素を含んでいるにも拘らず順調に習得が進んだ単語に関しても、自分との関わり  
の強さ等、他方面からの調査を進めることで、習得を促進させる新たな側面を見出す  
ことができると考える。

## 付記

本稿は2013年に麗澤大学大学院言語教育研究科・日本語教育学専攻に提出した修士論文  
「中国語母語話者のカタカナ語の習得過程——単語テストの表記を縦断的に追う中で——」  
を基に、加筆修正したものである。本稿の執筆にあたり、筆者の指導教官である大関浩  
美先生、並びに井上優先生に細部にわたるご指導をいただいた。また、データの収集に  
関しては、都内の日本語学校のご理解のもと、在籍する留学生や先生方の協力を得て実  
現したものである。関係諸氏の皆様に、感謝の意を表す。

## 参考文献

- 岡本智子 (1997) 「外来語の習得ストラテジー——中国で学ぶ中国人研究者に見る外来語  
の中間言語——」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』23, pp.97-109.
- カッケンブッシュ知念寛子 (2008) 「外来語教育の視点——日本語教育の立場から——」  
戸田貴子編著『日本語教育と音声』 pp.83-99. くろしお出版、
- 熊抱ゆかり (2003) 「カタカナの氾濫——現在の動向と今後の対応——」『比較文化研究』  
61, pp.21-31. 福岡大学
- 国立国語研究所「外来語」委員会編 (2006) 『分かりやすく伝える 外来語言い換え手  
引き』 ぎょうせい
- 国立国語研究所「外来語に関する意識調査」(2004) <http://ninjal.ac.jp/archives/genzai/ishiki>
- 近藤安月子・小森和子 (2012) 『研究社 日本語教育辞典』 研究社
- 陣内正敬 (2008) 「日本語学習者のカタカナ語意識とカタカナ語教育」『言語と文化』11,  
pp.47-60. 関西学院大学.
- 畑ゆかり・山下直子 (2010) 「語彙指導を目指したカタカナ語の誤用に関する分析——留  
学生に対するディクテーション調査から——」『香川大学教育実践総合研究』20,  
pp.25-32.
- 文化庁 (1991) 「内閣告示二号・内閣訓令 (国語表記の基準 - 外来語の表記-文化庁)」  
[http://www.bunka.go.jp/kokugo\\_nihongo/joho/kijun/naikaku/gairai/honbun06.html](http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/joho/kijun/naikaku/gairai/honbun06.html)

## 使用教材

- スリーエーネットワーク編著 (1998初版2007第15刷) 『みんなの日本語初級 I 本冊』 ス  
リーエーネットワーク